

◇ 天野和夫賞 ◇

## 天野和夫賞

### 第18回受賞者および選考理由

#### 1. 天野和夫賞の趣旨

本賞は、法哲学者としても活躍された立命館大学元総長・学長、故天野和夫先生のご令室・天野芳子様のご寄付に基づき、法の基礎理論研究の成果によって学問の発展に多大な貢献をしたと認められる、主として若手の研究者を表彰し、その研究を奨励することを目的とする。

#### 2. 本賞の対象

天野和夫研究奨励金規程（以下、規程）第3条の該当者

「法の基礎理論研究において優れた研究をもって学界に貢献した者」

#### 3. 第18回天野和夫賞選考の経過

2020年度については、規程第6条に基づき、山本忠・本学法学部教授（法学研究科長）を委員長とし、田中成明・京都大学名誉教授（法哲学専攻）、河野恵一・本学法学部教授（法史学専攻）、平野仁彦・本学法学部特別任用教授（法哲学専攻）、渡辺千原・本学法学部教授（法社会学専攻）、菊地諒・本学法学部准教授（法哲学専攻）安井栄二・本学法学部教授（大学院担当副学部長）を委員として天野和夫賞選考委員会が組織された。選考委員会は、2020年11月17日に開催され、選考の結果、以下のように決定した。

#### 4. 第18回天野和夫賞受賞者とその選考理由

規程第3条該当者

代田 清嗣 氏

最終学歴：2017年3月 名古屋大学大学院法学研究科博士後期課程  
(総合法政専攻) 修了

\*名城大学法学部助教を経て、2019年4月より同校法学部准教授  
専門分野：日本法制史

学 位：博士（法学）名古屋大学（2017年3月）

著 書：『徳川日本の刑法と秩序』名古屋大学出版会（2020年）

### 【選考理由】

本書は、徳川幕府の刑法、特に刑事責任のあり方に関して、判例の丁寧な検討を数多積み重ねることを通じて、当該期に固有の法理を解明することを旨とした労作である。

近世日本の刑事法、特に幕府刑事法の制度や法理については早くから研究が進められ、1970年代ごろには相当程度体系的、具体的な幕府刑事法像が構築されるに至った。それらの多くは、西洋近代的な法概念や法制度に基づいてそれらを理解し意義づける伝統的法制史学の手法による重要な成果である。その後、数多くの個別研究が積み重ねられる中で、新事実が多く解明され、修正が加えられつつも、伝統的な成果のかなりの部分が、依然として通説の位置を占めている。

代田氏は本書において「西洋近代的な法概念との単純な比較という方法によっては、徳川幕府刑法を十分に理解することができない」（309ページ）と述べる。この認識に基づき、当時の幕府における刑事責任観に関して、伝統的手法とその成果を批判的に継承しつつ、新たな理解の枠組みを提示することを試みた。

具体的な検討対象として ①「不念・怪我」概念、②共犯、③被害者の責任、以上の3点が提示される。従来、①は過失犯の類型として、②は幕府刑法の主観主義的傾向の反映として、③は正当防衛や私的刑罰権と関連付けて、それぞれ論じられてきた。氏は、それらの議論を子細に検討し、

近代法概念に基づく理解の到達点と限界を的確に指摘する。それを踏まえ、関連する判例等の史料を丹念に分析し、幕府による科刑ないし処遇決定のあり方、その根拠となる刑事責任の考え方について、当時の実像を解明してゆく。その成果として氏は、「立場責任」と呼ぶべき観念が徳川幕府の刑事責任観の根幹にあることを見だし、その重要性を指摘する。すなわち、幕府は人々に対し、刑事事件の状況下において、加害者、被害者、その他関係する者すべてが、それぞれの身分や立場に応じた適切な意識を持ち行動すべきことを求めた。その「立場責任」を果たすことを怠った程度に応じて、科刑や処遇の決定がなされていたというのである。ここで提示された新たな刑事責任観は、徳川幕府刑法研究の進展、特に科刑のありかたを解明していくことに寄与することが期待される。

本書で展開される議論は、膨大な史料の博搜と丹念な分析に基づいた、優れて実証的な成果である。同時に、刑法学の理論や諸概念に関する深い理解に支えられた、理論面でも優れた業績である。前近代日本法史を専門とする若手研究者が少ない中、法学、歴史学の優れた資質を兼ね備える代田氏は貴重な存在である。本書はその実力が存分に発揮されたものであり、天野和夫賞に相応しい内容であると評価する。

## 5. 天野和夫賞授与式

2020年12月7日、本賞の受賞者出席のもと、安井栄二・大学院担当副学部長の司会により「天野和夫賞第18回授与式」が開催された。まず徳川信治・法学部長から開会の挨拶がおこなわれた。山本忠・法学研究科長（選考委員長）より賞状ならびに副賞が授与され、続いて祝辞および選考理由が説明された。そして、受賞者の代田氏から感謝の辞が述べられた。最後に授与式出席者で集合写真を撮り、式は和やかに終了した。